広島大学大学院教育学研究科紀要　第二部　第51号　2002　177－196

英語母語話者による音調を通した意図の認識と具現化

―イントネーション研究におけるモデルとの比較から―

大　和　知　史

(2002年9月30日受理)

Recognition and Realisation of Illocutionary Force through Intonation by Native Speakers of English: Comparison with the Models in Intonation Studies

Kazuhito Yamato

This paper examines the recognition and realisation of illocutionary force through intonation by native speakers of English and confirms if the native speakers of English recognise and realise illocutionary force through intonation as the models from the intonation studies do. In the recognition survey, participants were asked to listen to the dialogues and to judge intentions in these dialogues. In the realisation survey, they were asked to read aloud the dialogues with the instructed intentions. The results of the recognition survey illustrated that participants recognised approximately 30 percent of the intentions through intonation and that varieties of English did not affect their judgment of intention. Illocutionary forces of "implication, possibility" and "exclamation" are recognised easier than other illocutionary force such as "warning". The results of the realisation survey showed that participants succeeded in realising approximately 28 percent of the dialogues corresponding to the model tone choice. Again, illoctuionary forces of "implication, possibility" and "exclamation" are realized easier than other illocutionary force such as "warning". Overall results show that even native speakers of English do not recognise and realise illocutionary force through intonation as the intonation studies described. However, some common features with models were observed and although being different from the models, certain tendencies can be detected from the subjects' data. Thus, the results of this survey do not mean that intonation does not contribute to illocutionary force at all, but suggest that to a certain degree intonation definitely plays a role in conveying illocutionary force.

Key words: intonation, illocutionary act, native speakers of English
キーワード：イントネーション，発語内行為，英語母語話者

1．はじめに

これまで英語イントネーションにはさまざまな機能があることが明らかとなっているが，中でも，イントネーションの「語用論的機能」に関しては，その認識，具現化を誤ることで談話の流れに支障をきたすことが報告されている（Gumperz 1982; Clennell 1997）。イントネーションの「語用論的機能」とは，イントネーションによって話者が何かを言うときの目的を提示するものであり，例えば話者が物を尋ねているのか，命令をしているのか，感謝しているのか，を示すといっ

本論文は，課程博士候補論文を構成する論文の一部として，以下の審査委員により審査を受けた。
審査委員：中尾佳行（主任指導教官），小篠敏明，
町　博光，三浦省五，森　敏昭

たものである。換言すれば，「イントネーションによって発語内行為[1]を表示」しているのである。この機能に関する例として有名なものが，Gumperz (1982) にあげられている（例1参照）。

（例1）　従　業　員：//↘GRAvy//
　　英語母語話者：//↗GRAvy//

イギリスの空港のカフェテリアに勤務するインド・パキスタン系従業員は，彼らの発するイントネーションのみによって "surly and uncooperative" という評判を得てしまった。なぜなら，"Gravy" を供する際に，英語母語話者であれば上昇調（勧める）を用いるところを彼らは下降調（述べる，あるいは命令）を用いて発話していたからである。

しかしながら，これらの例はいずれも英語学習者によるものであり，英語母語話者同士のやり取りにおいてはどの程度イントネーションの語用論的機能が働いているのか，については明らかではない。それでは，実際に「英語母語話者はどの程度イントネーションによる発語内行為を表す機能を認識，具現化できる」のであろうか。

そこで本論では，英語母語話者による英語イントネーションによる発語内行為を表す機能の認識と具現化に焦点を当てた調査を行い，その結果と考察を提示する。具体的には，被調査者となる英語母語話者が，イントネーション研究において提示されているモデルと同じ音調の認識と具現化を行うか否かを比較考察するものである。

2．先行研究からの課題点

本項では，これまで行われてきたイントネーションにかかわる発話と意図，あるいは感情の認識に関する調査の問題点を指摘し，それらを解消しうる観点を提示し，本論での調査課題を導き出す。また，英語母語話者による音声の産出，特に意図の具現化を考察した研究が少ない点も指摘し，具現化調査の意義についても触れる。

これまでイントネーションにかかわる感情の認識に関する研究が数多く行われている (Frick 1985; Ladd et al. 1986)。Graham et al. (2001) は，これまでの感情の認識に関する調査を広範にレヴューした上で，役者によって感情を込められた音声から，その感情を把握する調査を行った。その結果，聞き手である英語母語話者は，高い確率で感情を把握することができていることが分かった (58.6%)。この結果は，これまでの先行研究において得られた結果とも一致している。しかし，イントネーションにかかわる感情を考察する上で，研究者によって記述される感情が一定ではない点が問題となっている。この点を十分に考慮した Graham et al. (2001) においてさえも，その問題点は解消されていない。

これまで英語母語話者による認識に関する研究も多く行われている (Fayer and Krasinski 1987; Matsunaga and Caprio 1989; Anderson-Hsieh, Johnson and Koehler 1992; Derwing and Munro 1997; Munro and Derwing 1999)。この背景には，アメリカにおける移民や留学生の増加に伴う非英語母語話者の社会参画も盛んになったことがある（田邉 1999)。これらの研究は，非英語母語話者による英語がどの程度英語母語話者に近いかどうかという点がその焦点となっている点が注意される。

また，その際の方法としては，ディクテーション課題やリカートスケールによって理解のしやすさを判断するものなどが採られていた。例えば，Munro and Derwing (1999) において，イントネーションは9段階のリカート・スケールで判断されていたが，その両端には，"native-like" から "not at all native-like" と記されている。その他の研究においても言葉の差こそあれ，同様の尺度を用いている。これらの研究の問題点として，英語母語話者への近似性にのみ焦点がいき，非英語母語話者の英語によってどの程度意図が伝達されるかという点を看過している点が指摘できる（拙論 2001)。

以上の先行研究の検討から，これまで感情の認識に関する研究，英語らしさに関する研究の問題点が明らかになった。これらの問題点を解消すべく，新たな観点を提示することとする。それが，語用論的機能（発語内行為の伝達）への着目である (Luthy 1983; 拙論 2000)[2]。まず，感情の認識に関する研究において問題となった，カテゴリーの恣意性に関しては，意図を理論的背景（発話行為理論：Austin 1962; Searle 1969）を持って捉えることである程度の解消を見ることができよう。また，英語らしさに関する問題点については，英語母語話者に近いか否かよりも発話意図が伝達されたか否かを判断基準とすることで解消されるであろう。

具体的な方法としては，意図を捉える際には発話行為理論をもとに，発語内行為とイントネーションとの関連を捉えたTench (1996) による枠組みを参照することとする。そして，意図が伝達されたかどうかを判断する際に用いるのが，言い換え文を選択肢にする (paraphrased meaning test) ことである (Levis 1999)。

一方，英語母語話者の発したイントネーションに関する研究は多く行われており (Pike 1945; Kingdon

1958; O'Connor and Arnold 1973 Cruttenden 1997; Roach 2000; Hirst and Di Cristo 1998 など），様々な観点から考察され，記述されている。しかしながら，意図の反映を考慮してその韻律的特徴を考察した研究は筆者の知る限り少なく，多くが文法構造や感情態度との関連などから記述されている。発語内行為など意図を考慮した研究としては，Peppé et al.（2000）などを除いてそれほど行われていないようである。Peppé et al.（2000）は，ロンドンに居住する英語母語話者による音声を分析し，その社会的属性による違いを考察した。結果，比較的均一な英語母語話者内においても，韻律使用は多岐に渡っていることが明らかとなった。

意図を考慮した研究がこれまでに少ない点は上に述べた通りであるが，さらには，認識と具現化との両面を捉えたものや，それらの関連を考察した研究は筆者の知る限りこれまで余り見られなかった（cf. Peppé et al. 2000）。この点においても本研究の独自性を見出すことができる。

調査課題

以上に述べたように，これまでの先行研究において，英語母語話者による感情及び英語らしさを考察したものには問題点があることが明らかとなった。また，英語母語話者による感情及び意図の具現化を考察したものに関しても，依然として課題が残っている領域であることが分かった。

そこで，本論においては，上記の問題点，課題点を解消するために，「英語母語話者は英語イントネーションの語用論的機能をどの程度認識し，どのように具現化しているか」を調査課題とし，英語母語話者（18人）に対して調査を行った。その結果と考察から，英語母語話者による英語イントネーションを通した発語内行為の認識と具現化における特徴を明確にし，それらと規範となるBrazil et al.（1980），Roach（2000）による音調使用との相違点を確認する。こうすることにより，日本人英語学習者に対して同様の調査を行う際の，比較の対象を確定することができる。

3．調　査

3.1．方法

被調査者

被調査者として，英語母語話者（18人）を対象とした。男10人，女８人であり，平均年齢は32.4歳であった。国籍はアメリカ，イギリス，カナダ，オーストラリア，ニュージーランドとさまざまで，中学・高校に勤務するALT，大学教員，留学生などが主である（詳細はAppendix A を参照されたい）。本調査における英語母語話者とは，英語を母語とする国々出身の者であり“inner circle（Kachru 1985）”に当たるものとしている。

調査材料

調査材料の選定の際には，１）不特定な要素が介在しないよう適度に短い発話であるもの，２）イントネーションと発語内行為との関連が比較的明確であるもの，３）談話として成立しえるもの，の３つを考慮した。結果，Tench（1996）による枠組みを用いて，調査に用いる調査材料を選定することとした。その結果，Brazil et al.（1980），Roach（2000）において用いられている９つのダイアログを改編し用いることとした（詳細はAppendix B を参照されたい）。認識調査用には，話者Aに英語母語話者（イギリス人男性）による音声を，話者BにBrazil et al.（1980），Roach（2000）に付属のテープ及びCDによる音声（ともにイギリス人男性）を用いて，それらを編集したものを作成した。具現化調査においては，話者Aに英語母語話者（イギリス人男性）による音声をプロンプトとした。

調査手順

一連の調査は，2002年３月から６月にかけて実施された。実施場所は，国立大大学内のLL教室コンソール，国立大学附属高校LL教室，などにおいて行われた。

調査の手順は，まず認識調査として，AとBとの間になされるダイアログが放送され，それらを聞き意図を多肢選択方式により判断する調査を行った。その後，具現化調査として，AとBとの間になされるダイアログが９つ提示された。被調査者にはそれぞれについて話者Bになったつもりで発話することが指示された。そして，その音声を録音するというものである。それぞれの対話においてその状況と話者Bの意図が説明されており，被調査者はその意図を持って発話するよう指示された。

録音の際に用いた機器は，LL教室コンソールにおいて実施した際には，ソニー社製のDATエディター（PCM-E7700），DATプレーヤー（DTC-A8），マイク（C-48），ミキシングマシン（MXP-210），テープデッキ（SRP-CT3W），MDプレイヤー（MDS-B5）を用いた。その他の場所において実施した際には，ソニー社製のポータブルMDレコーダー（MZ-R909），MDラジカセ（ZS-M75），パナソニック社製のマイク（WM-D120SW-K）を用いた。

音声資料分析の手順

上に述べた手順により収集された音声資料を分析するにあたり，MD及びカセットテープにダビングした音声資料を，USBデジタルオーディオプロセッサ

（オンキョー社製，SE-U77）を介してパソコンへ取り込んだ。パソコンへ wave. ファイルとして取り込んだ音声を，音声分析ソフト『音声録聞見 ver.2.3.0』，『杉スピーチアナライザー』を用いて分析を行った。なお，音声分析の判断に関しては，Brazil et al. (1980)，Roach (2000) をモデルとみなしており，モデルと日本人英語学習者による音声とを「正規化によるピッチ曲線の比較」の機能（杉藤2001）[3]および Brazil (1997) による記述を基に，音調を判断した。

3.2. 結果と考察

3.2.1. 認識調査の結果と考察

結　果

まず，認識調査における被調査者の結果を提示する。なお，認識調査においては，被調査者は9つのダイアログに対する意図の選択を行っており，それらを9点満点のリスニングテストであると考えることができることに留意されたい。

表1．被調査者による認識調査の結果

標本数	平均	中央値	最頻値	標準偏差	分散	最小	最大
18	3.11	3	2	1.41	1.99	1	6

表1に示されるように，被調査者である英語母語話者（n=18）による認識調査の平均点は3.11点であった。英語母語話者とは言え，9点満点はおらず6点が最高点であった。

次に，被調査者による各ダイアログの回答傾向はどのようであろうか。各発語内行為別に正答数の結果を提示すると以下の表2のようになる。

表2．発語内行為別の認識調査の結果

ダイアログ		1	3	2	5	6	4	7	8	9
発語内行為		述べる	注意･警告する	ほのめかす			驚きを表す			
モデルの音調		下降	上昇	下降上昇			上昇下降			
選択肢	a)	7	3	0	1	0	5	3	4	0
	b)	10	0	1	1	8	7	10	5	13
	c)	1	1	1	1	4	2	0	7	0
	d)	0	5	12	12	5	2	4	2	2
	e)	0	9	3	3	1	1	1	0	3

（ダイアログにより選択肢が異なるため、正答箇所が異なっている）

発語内行為別の結果から，発語内行為「ほのめかす」，「驚きを表す」において正答数が多くなっている。それらの中でもダイアログ5「ほのめかす」では12人が，ダイアログ7，9「驚きを表す」では順に10人，13人が正答を得ている。しかし同じ発語内行為でも，ダイアログ2「ほのめかす」や4「驚きを表す」においては正答数が少なくなっている（順に，1人，2人）。

考　察

まず，認識調査のスコアの平均が3.11点であった点に関して，このスコアを低いと解釈するか，高い（とは言わないまでも比較的十分である）と解釈するか，見解が分かれるところである。ここでは，両方の解釈を提示する。

まず，「低い」と解釈すると，被調査者である英語母語話者において音調による意図の認識はそれほど行われていないと考えられる。つまり，聞き手にとって音調は意図の伝達にそれほど大きな役割を果たしていないと判断できよう。聞き手にとって，意図の判断に関与する要因が他に存在するということを示唆している。例えば，多くの被調査者があげていた，話者の表情やジェスチャーといった視覚的情報やコンテクストなどがなかったため，分かりにくかった，というコメントがこのことを示している。

一方，「高い」と解釈する際には，上の記述を逆に考えることになる。話者の表情やジェスチャーといった視覚的情報やコンテクストが無く，聴覚情報のみで意図を認識する時に30％の確率は高いと解釈するのである。様々な要素が相互補完的に用いられている中で，音調（あるいはその他の音声的要素）は発語内行為の認識において30％程度の貢献をしていると考えることができよう。また，水光（1985）は，70から80％の音調は態度の意味に関して中立であり，文の構造によって決まるものであると述べている（104）。この点からも，上述の30％の貢献は必要かつ十分なものであると考えられ，「高い」と解釈してよいであろう。したがって，本調査における結果は，高いものであると言えよう。

次に，各ダイアログを発語内行為別に分類した結果を考察する。すると発語内行為とその正答数の傾向に変化が見られる。まず，ダイアログ5から9において正答数が多くなっている点が顕著とは言えないまでも，明らかである。これらのダイアログは「ほのめかす」，「驚きを表す」を具現化しているものである。これらの発語内行為に関しては，被調査者は音調による意図の伝達を認識する傾向にあると言ってよいであろう。換言すれば，発語内行為の種類によって音調の働く度合いが異なるということであろう。

この点は，認識の度合いが低かった「注意・警告する」においても言える。後述する具現化調査においては，「注意・警告する」と上昇調との関連が見られず，音調以外の音声要素を用いていることが明らかとなった。つまり，「注意・警告する」においては音調の働く度合いは低くなっていると言えよう。ある発語内行

為は音調が中心的役割を果たし，またある発語内行為はパワーが中心的役割を果たす。つまり，発語内行為の種類によって，用いることのできる音声要素の幅が異なることが原因として考えられる。

「ほのめかす」,「驚きを表す」の一部（ダイアログ2，4）において正答が少なかったダイアログが見られたことに対する原因としては，ダイアログの難易度が考えられよう。これらのダイアログはともに "in the cupboard" という発話であり，その他の "yes" や "no" に比べて音節数も多かった。したがって，不特定要素が多くなった結果が，正答の少なさとなって表れたのではないであろうか。

また，認識調査において提示した音声資料は Brazil et al. (1980)，Roach (2000) から抽出したイギリス人男性によるものであったことが回答の際に影響したことが考えられる。実際，被調査者の中にはイギリス英語は分かりにくいとコメントをしているものもいた。そこで，イギリス人被調査者（$n=7$）とその他の被調査者（$n=11$）による認識調査のスコア平均を比較した。前者は3.71点であり，後者は平均2.73点であり，それらの間に有意な差は見られなかった（$t_{(1)}=1.44, p>.05$）。したがって，英語変種に対する耐性などの影響は特に見られないことが確認された。

3.2.2. 具現化調査の結果と考察

結　果

まず，被調査者による音調使用とモデルとの一致の度合いを示す。先述の通り，音調の判断の際には，『杉スピーチアナライザー』を用いており，モデルであるBrazil et al. (1980)，Roach (2000) の音声資料と同じ音調を用いていれば正答とみなす（モデルの音調分析は Appendix C を参照されたい)。したがって，具現化調査においても9点満点のスピーキングテストであると考える。以下の表3に被調査者の用いた音調とモデルの音調との一致度を示す。

表3．被調査者の用いた音調とモデルの音調との一致度

標本数	平均	中央値	最頻値	標準偏差	分散	最小	最大
18	2.89	2.50	2	1.41	1.99	1	5

表3を見ると，被調査者である英語母語話者（$n=18$）による具現化調査のスコアの平均（一致度の平均）は2.89点であった。先ほどの認識調査よりもさらに低いスコアとなっている。

それでは，各ダイアログにおいてどのような音調を用いていたのであろうか。被調査者が各ダイアログにおいてどのような音調を用いたかを表4に提示する。

表4．被調査者によって用いられた音調

	各ダイアログにおけるモデルの意図と音調								
	1	3	2	5	6	4	7	8	9
	述べる	注意・警告する	ほのめかす			驚きを表す			
	下降	上昇	下降上昇			上昇下降			
下降	**15**	16	15	4	2	9	11	9	9
上昇	0	**0**	1	3	3	7	2	1	2
上昇下降	3	1	2	0	0	**2**	**5**	**7**	**7**
下降上昇	0	1	**0**	**8**	**9**	0	0	0	0
平坦	0	0	0	3	4	0	0	1	0

（網掛けはモデルと一致している箇所である）

表4を見ると，全体的に下降調を多く用いていることが分かる。発語内行為「述べる」において最も多い15人が下降調を用い正答を得ている。次いで「ほのめかす」（ダイアログ5，6）において8人，9人が下降上昇調を，「驚きを表す」（ダイアログ7，8，9）において順に5人，7人，7人が上昇下降調を用い正答を得ている。

また，「ほのめかす」（ダイアログ2）や「注意・警告する」（ダイアログ3）においては，まったく正答を得ておらず，ともに下降調への選択が多い（順に16人，15人)。特に「注意・警告する」においては，下降調を用いているものの，パワーを大きくすることによってその他の下降調を用いたダイアログとの差異化を図っていたようである。下図1では，"in the cupboard" の "IN" の部分（左側の急激な変化を起こしている箇所）において大きなパワーを用いている様子がうかがえる。

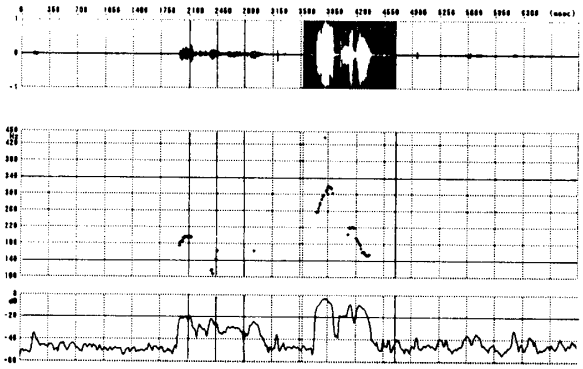


図1．被調査者(NS1)によるダイアログ3の音調分析

考　察

モデルとの一致度において，平均2.89点というスコアから被調査者である英語母語話者（$n=18$）はモデルと同じような音調操作を行っているとは言えないことが明らかとなった。先の認識調査の結果と同じく，このスコアが高いか低いかを一概に決定することは困難である。

発語内行為別にどのような音調を用いていたかを考

察すると，全体として下降調が多くなっていることが明らかとなり，被調査者である英語母語話者にとって最も基本的な音調であったと言える。結果として，発語内行為「述べる」におけるモデルとの一致度が非常に高いものとなったと思われる。

しかしながら，「ほのめかす」(ダイアログ5，6）や「驚きを表す」(ダイアログ7，8，9）においては，下降調の割合が支配的ではなくなる。これらのダイアログにおいては，正答数が比較的多く，モデルとの一致度が高くなっていた。例えば，下図2はダイアログ5における正答例であり，モデルと同じ下降上昇調が用いられている様子がよく分かる。これらの発語内行為に関しては，被調査者である英語母語話者（$n=18$）は，音調による意図の具現化を図っていると言えよう。

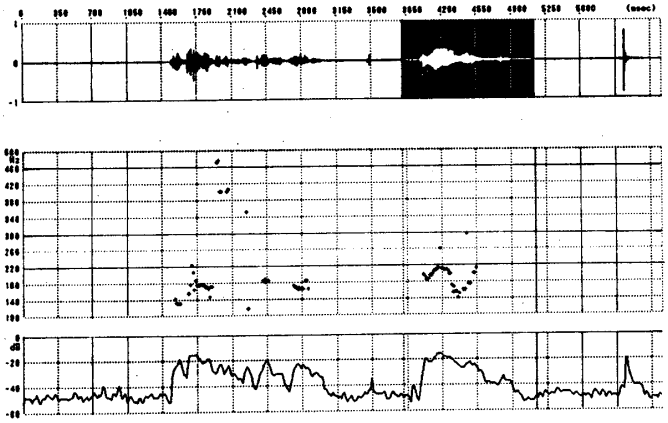


図2．被調査者(NS2)によるダイアログ5の音調分析

また，「注意・警告する」（ダイアログ3）においては，音調ではなくパワーを用いることによって発語内行為の具現化を図っているようであった。以上を総合すると，発語内行為の種類によって用いる音声要素（あるいはその配分）を変えているのかもしれないということが明らかにされた。このことは，先の認識調査における「注意・警告する」を遂行するダイアログに対して正答がほとんどなかったこととも一致するのである。

認識調査の際にも述べたように，モデルとした音声資料がイギリス人男性によるものであったことが，一致度のスコアに影響を与えた可能性があるのではないであろうか。ところが音調の使用（具現化）に際しては，その違いはそれほど無く，むしろイギリス人英語母語話者よりもその他の英語母語話者の方が一致度は高かった（順に2.71と3.00)。また，イギリス人英語母語話者とその他の英語母語話者の平均スコアの間に有意な差も検出されなかった（$t_{(1)}=0.39, p>.05$ ）。これは，英語母語話者の変種にかかわらず下降調の使用が集中したこと，発語内行為「ほのめかす」，「驚きを表す」における回答傾向などが共通していたことが原因と考えられ，いずれの英語変種話者であってもある程度の一致を見せている。

3.2.3. 認識と具現化との関連

認識調査と具現化調査の違いとして，コンテクストに対する意識の違いがある。認識調査においては，ダイアログが質問紙上に示されているのみでその状況に関しては述べられていない。一方具現化調査においては，被調査者には対話カードが配布された際，各ダイアログの状況と意図が簡単に説明されており，その役割になりきるように指示された。このような違いのある両調査ではあるが，次のような関連が明らかとなった。

認識調査と具現化調査の両方に共通した点は，発語内行為「ほのめかす」，「驚きを表す」に対して高い正答数を得ていることである。これはそれぞれの発語内行為に対して認識の際にはモデルの用いる下降上昇調，上昇下降調に反応しており，なおかつ具現化の際にはモデルと同じ音調を用いていることを示す。一方，正答数が低いものである発語内行為「注意・警告する」に関しては，認識と具現化に共通してモデルとは異なることが明らかとなった。したがって，被調査者となった英語母語話者は発語内行為「注意・警告する」においては，上昇調ではなく，その他の音調，あるいは音声要素を用いることが明らかとなった。

認識調査と具現化調査で相違があったものは，発語内行為「述べる」のみであった。認識の際には，7人が正答を得ていたが，10人が「ほのめかす」に相当する項目を選択していた。しかしながら「述べる」を具現する際には，15人が下降調を用いていた。ここでこの項の冒頭に述べた認識調査と具現化調査の違いの影響が表れたのではないであろうか。つまり，コンテクストの希薄な認識調査においては，様々な要因を考慮に入れながら回答せざるを得ないが，具現化においてはダイアログと意図の確定が行われている。そのため，認識においては回答が分散され，具現化においては回答が固定化したのではないであろうか。

もうひとつ認識調査と具現化調査との間に共通したものがあった。それは，いずれも「モデルであるイギリス人による英語によって著しく影響を受けてはいない」，ということである。被調査者の背景は Appendix A より多岐に渡っていることが明らかであるが，ある程度の共通項が見られたことから，英語母語話者としての傾向が表れたと考えられよう。

4．結論と今後の課題

以上のように，英語母語話者を被調査者として音調を通した発語内行為の認識と具現化に関する調査の結果を述べた。それらを再度まとめると，次のようになる。

認識調査においては，9つのダイアログに対する正答数の平均が3.11点であったことから，英語母語話者にとって話者の意図を把握する上でモデルのイントネーションが果たした役割はおよそ30パーセントであることが明らかとなった。これは状況がはっきりせず，相手の表情，ジェスチャー等が見えない状態であることを考えると，比較的高いと考えてよいであろう。また，発語内行為「ほのめかす」，「驚きを表す」に対する認識の正確さが高かったことから，被調査者である英語母語話者にとって，発語内行為の種類によってイントネーションの貢献する度合いが高いものがあることが明らかとなった。

具現化調査においては，モデルとの一致度の平均が2.89であったことから，被調査者である英語母語話者はモデルと同じイントネーション使用をしていないことが明らかとなった。その際には，音調の種類が異なるのみならず，その他の音声要素（パワーや卓立の位置の変化など）を用いていることが明らかとなった。とは言え，発語内行為「述べる」，「ほのめかす」，「驚きを表す」においては，モデルとの一致傾向が高いことが明らかとなった。このことは，特定の発語内行為に関してはモデルと同じイントネーション使用を行うことで意図を具現化していることを示していると考えられる。

両者の関連に関しては，認識，具現化共に特定の発語内行為「ほのめかす」，「驚きを表す」において正答を得ていることから，被調査者である英語母語話者にとって発語内行為と音調との関連が深いことが明らかとなった。したがって，これらの発語内行為の遂行においてイントネーションの果たす役割は，英語母語話者にとって共通であると考えられる。逆に，「注意・警告する」においては認識，具現化共にモデルとは異なっており，発語内行為と音調，あるいは他の音声要素との関連の実態が浮かび上がった。

これらの結果から，英語母語話者によるイントネーションを通した発語内行為の認識と具現化は，いずれもモデルとの比較においては高くないことが明らかとなった。しかしながら，発語内行為別に見るとモデルとの一致の度合いが高いものの存在が明らかとなり，それらは認識と具現化に共通していることから，英語母語話者に共通の傾向であると考えられる。この時，英語母語話者の変種は関わらないことも分かった。

本調査の結果を比較の対象とみなすこととして，今後の課題を述べる。日本人英語学習者に対して同様の調査を行った場合に，モデルとの比較を行って正答が高い，低いといった判断を安易に行ってはならない。なぜなら，今回の被調査者である英語母語話者と，モデルである Brazil et al. (1980)，Roach (2000) の音声資料とが必ずしも一致しているわけではないことが明らかとなったからである。

イントネーション研究において述べられているモデルのみならず，本調査の結果とを合わせて考察することで，より英語母語話者の実態を反映した状態で日本人英語学習者によるイントネーション使用を吟味することができると考える。本調査は，英語母語話者の実態を把握することができた点，今後の調査に対する重要な比較の対象を得るという点，の2つにおいて示唆に富むものであったと結論付けることができる。

【註】

1）発話行為理論（speech act theory）において，発語行為（locutionary act），発語内行為（illocutionary act）という訳語に統一していることに注意されたい（サール（著）坂本（訳）1986；クールタード（著）吉村，他（訳）1999；ヴァンダーヴェーケン（著）久保（訳）1995など）。

2）発話行為と音調の関連に着目した研究として Geluykens (1987) がある。宣言文に下降，上昇のピッチを合成し，英語母語話者に対して聞き取りを行い，音調の影響は少ないと結論付けている。しかしながら，発語内行為が「述べる」，「尋ねる」のみであること，認識のみに焦点を当てているという点に課題が残っている。

3）「正規化によるピッチ曲線の比較」の機能とは，異なる音声データの時間長を同一にして，ピッチ曲線を比較することができる機能である。

【参考文献】

Anderson-Hsieh, J., Johnson, R. and Koehler, K. (1992). The relationship between native speaker judgments of nonnative pronunciation and deviance in segmentals, prosody, and syllable structure. *Language Learning*, **42**, 529-555.

Austin, J. L. (1962). *How to do things with words.* Cambridge, Mass.: Harvard University Press.

Brazil, D., Coulthard, M. and Johns, C. (1980). *Discourse intonation and language teaching.* London:

Longman.

Clennell, C. (1997). Raising pedagogic status of discourse intonation teaching. *ELT Journal,* **51**, 117-125.

Coulthard, M. (1985). *Introduction to discourse analysis.* London: Longman. (吉村昭市，貫井孝典，鎌田修（訳）．1999.『談話分析を学ぶ人のために』．京都：世界思想社.)

Cruttenden, A. (1997). *Intonation.* 2nd edition. Cambridge: Cambridge University Press.

Derwing, T. M. and Munro, M. J. (1997). Accent, intelligibility, and comprehensibility: evidence from L1s. *SSLA,* **19**, 1-16.

Fayer, J. M. and Krasinski, E. (1987). Native and nonnative judgments of intelligibility and irritation. *Language Learning,* **37**, 313-326.

Frick, R. (1985). Communicating emotion: the role of prosodic features. *Psychological Bulletin,* **97**, 412-429.

Geluykens, R. (1987). Intonation and speech act type: an experimental approach to rising intonation in queclarative. *Journal of Pragmatics,* **11**, 483-494.

Graham, C. R., Hamblin, A. W. and Feidstein, S. (2001). Recognition of emotion in English voices by speakers of Japanese, Spanish and English. *IRAL,* **39**, 19-37.

Gumperz, J. J. (1982). *Discourse strategies.* Cambridge: Cambridge University Press.

Hirst, D. and Di Cristo, A. (eds.). (1998). *Intonation systems: a survey of twenty languages.* Cambridge: Cambridge University Press.

Kachru, B. B. (1985). Standards, codification and sociolinguistic realism: the English Language in the outer circle. In Quirk, R. and Widdowson, H. G.(eds.). *English in the World: Teaching and Learning the Language and Literatures.* Cambridge: Cambridge University Press.

Kingdon, R. (1958). *English intonation practice.* London: Longman.

Ladd, D. R., Scherer, K. and Silverman, K. (1986). An integrated approach to studying intonation and attitude. In Johns-Lewis, C. (1986). *Intonation in discourse.* Beckenham: Croom Helm. (pp.125-138)

Levis, J. M. (1999). The intonation and meaning of normal yes/no questions. *World Englishes,* **18**, 373-380.

Luthy, M. J. (1983). Nonnative speakers' perceptions of English "nonlexical" intonation signals. *Language Learning,* **33**, 19-36.

Matsunaga, T. and Caprio, M. (1989). Native and non-native speaker evaluation of non-native English students' language production. *JACET Bulletin,* **20**, 37-50.

Munro, M. J. and Derwing, T. M. (1999). Foreign accent, comprehensibility, and intelligibility in the speech of second language learners. *Language Learning,* **49**, 285-310.

O'Connor, J. D. and Arnold, G. F. (1973). *Intonation of colloquial English.* London: Longman.

Peppé, S., Maxim, J. and Wells, B. (2000). Prosodic variation in Southern British English. *Language and Speech,* **43**, 309-334.

Pike, K. L. (1945). *The intonation of American English.* Ann Arbor: University of Michigan Press.

Roach, P. (2000). *English phonetics and phonology.* 3rd edition. Cambridge: Cambridge University Press.

Searle, J. (1969). *Speech acts: an essay in the philosophy of language.* Cambridge: Cambridge University Press. (坂本百大，土屋俊（訳）．(1986).『言語行為　言語哲学への試論』．東京：勁草書房).

Tench, P. (1996). *The intonation systems of English.* London: Cassell.

Yamato, K. (2000). Native speaker reactions to Japanese EFL learners' speech, looking at intonation as an intention conveyor: A Pilot Study. *JACET Bulletin,* **31**, 91-104.

ダニエル・ヴァンダーヴェーケン（著）．久保進（訳注）．(1995).『発話行為理論の原理』．東京：松柏社.

水光雅則．(1985).『〈新英文法選書 1〉文法と発音』．東京：大修館書店.

杉藤美代子（監修・著）．(2001).『杉スピーチアナライザー』．横浜：株式会社アニモ.

田邉祐司．(1999).「実践的コミュニケーション能力の育成－新教育課程の下での新たな英語教育－新たな英語発音指導の形－」．*Journal of the Institute for Development of English Language Education,* **1**, 96-114.

東京大学大学院医学系研究科認知・言語医学講座．(2002).『音声録聞見 (ver.2.3.0)』．東京：デイテル株式会社.

大和知史．(2001).「日本人英語学習者のイントネーションに対する談話の観点からの分析」．『中国地区英語教育学会研究紀要』．**31**，125-134.

（主任指導教官　中尾佳行）

参考資料

Appendix A　NS の背景

No	年齢	性別	国籍	育った土地	最終学歴	その機関	職業	海外経験	期間（年）	英語以外の言語
1	24	女	CAN	Hamilton, Ontario	Bachelor degree	Univ. of Ottawa	translator	France, Belgium, Japan	1, 1 , 0.6	French
2	25	女	GBR	England	university	Univ. of Sheffield	English teacher	Austria, Tanzania, Japan	1.25, 0.5, 0.6	German
3	27	女	NZL	Christchurch	Master's degree	Christchurch and Hiroshima Univ.	student	Japan	1, 1, 2	Japanese
4	21	男	USA	Los Angeles, California	4th year college student	University of Hawaii at Manoa	student	Japan	0.6	
5	21	女	GBR	U.K.	B·tech foundation course, Kingston University	Leeds Metropolitan University	student	Japan, Singapore	4, 2	Spanish, some Japanese and French
6	42	男	GBR	Bangor, Northern Ireland	Master's degree	Edinburgh University	English teacher	Turkey, Japan	5, 5	French, German
7	25	男	GBR	Glasgow City, Scotland	degree	The University of Glasgow	English teacher	Japan	0.8	only a little Japanese
9	21	男	USA	USA	3rd year junior college	Hiroshima University	student	Germany, England, Japan, Spain	1, 0.1, 3, 0.1	
10	32	男	USA	Buffalo, New York	university	University of Buffalo	English teacher	Japan	0.5	Elementary German
11	24	女	AUS	Sydney	Postgraduate Diploma	Macquire University, Sydney	English teacher	Japan	1	Italian
12	22	女	GBR	Birmingham	Degree Law LLB	Cardiff University	English teacher	Japan	0.8	
13	35	男	USA	Los Angeles	M.A.	San Diego State University	Associate Professor	Japan	7	Japanese
14	57	男	USA	Defiance, Ohio	MBA Marketing	Sophia University, University of Michigan	Professor	Japan	6	Japanese
15	48	男	USA	St. Johns, Michigan	PhD Comprehensive Exams	Michigan State University	Professor	Japan	15	Japanese
16	24	女	IRL	Waterford City	Bachelor of Education, 3rd level	St. Patrick's College of Education, Dublin, Ireland	Elementary School teacher(currently AET)	Japan	N/A	Gaelic, French, German, Japanese
17	43	男	AUS	Adelaide city, South Australia	College	Adelaide College of the Arts and Education	English teacher	China, Japan	5, 8	
18	45	女	AUS	Adelaide city, South Australia	Bachelor of Education	Adelaide College of the Arts and Education	English teacher	China, Japan	5, 8	Chinese
20	48	男	GBR	Kent, England	RSA CTEFLA	Regent College, London	Teacher / Director of studies	France, Czechoslovakia, Japan	1, 1.5, 10	

（記述は被調査者本人によるものをそのまま掲載している。ただし、国籍は略称を用いた。）

Appendix B　調査に用いられたダイアログ

以下に調査材料に用いたダイアログを提示する。出典は Brazil et al. (1980), Roach (2000) において用いられている 9 つのダイアログを改編したものである。また，各ダイアログに付与されている意図を括弧内に記している。

① A: Where's the typewriter?
　B: //↘in the CUPboard//「述べる」

② A: Where's the typewriter?
　B: //↘↗in the CUPboard//「ほのめかす」

③ A: Where's the typewriter?
　B: //↗in the CUPboard//「注意・警告する」

④ A: Where's the typewriter?
　B: //↗↘in the CUPboard//「驚きを表す」

⑤ A: I've heard that it's a good school.
　B: //↘↗YES//「ほのめかす」

⑥ A: It's not really an expensive record, is it?
　B: //↘↗NO//「ほのめかす」

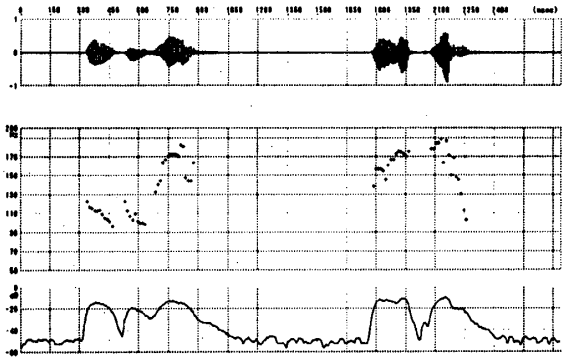
⑦ A: You wouldn't do an awful thing like that, would you?
B: //↗↘NO//「驚きを表す」

⑧ A: Isn't the view lovely!
B: //↗↘YES//「驚きを表す」

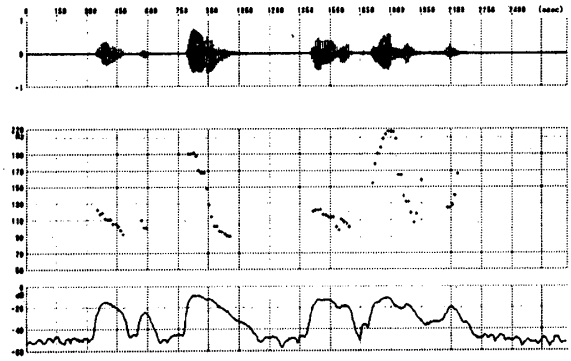
⑨ A: Do you like this one best?
B: //↗↘YES//「驚きを表す」

Appendix C　具現化調査におけるモデルの音調分析

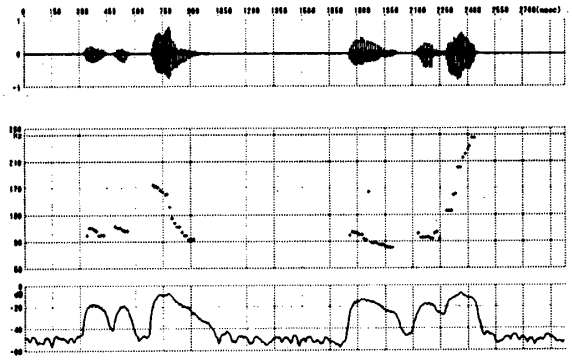
ダイアログ1（下降調）



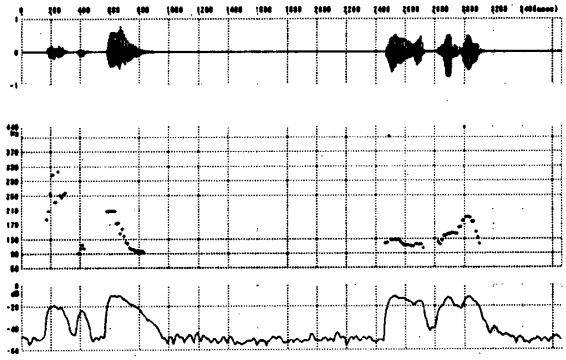
ダイアログ2（下降上昇調）



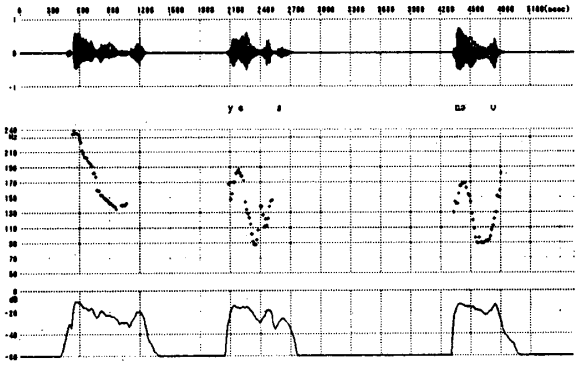
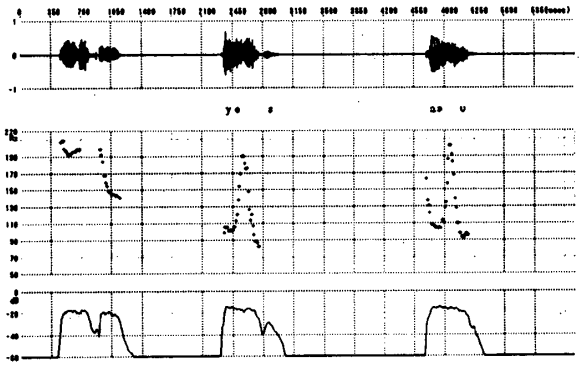
ダイアログ3（上昇調）



ダイアログ4（上昇下降調）



ダイアログ5，ダイアログ6（下降上昇調）



ダイアログ7，ダイアログ8，ダイアログ9（上昇下降調）